新左翼

1969年
2月25日
第21号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

記事紹介

二面
労働者と学生運動＝東大闘争座談会

三面
軍事輸送阻止を呼びかけ
関学全共闘救援カンパの訴え

四面
革命めざすブラジルの学生運動
ムーブメント誌より

共・右派の陰謀を粉砕

反戦学生の排除できず

17日 大阪総評拡大幹事会

大阪総評は十七日拡大幹事会をひらき、三派革マル系全学連の排除と、個人加盟組織をやめ団体加盟をするという反戦改組の提案を審議したが、多数の反対がでて激論となり結論がでないまま散会となった。

総評中央が反戦の改組を決定しても、これに反対してきた大阪総評は、今年に入るや従来の方針を百八十度転換して、今月の十三日に常任幹事会をひらき、先にのべた方針を決定した。全大阪反戦青年委員会は十四日代表者会議をひらき大阪総評に再検討を求める旨の声明（一面に掲載）を発表した。十七日には約七十名の反戦に参加する労働者が拡大幹事会の会場にあつまり、会議の席上で全大阪反戦の代表に発言させることと傍聴を大阪総評三役に要求して勝取った。このため会議は三十分おくれてはじまった。この会議では、全自運、高教組などの日共代々木派の幹事が常幹の提案を支持し、これに対して電通、市職、市従、国労、府職などが民青のゲバルトも反戦も総評の伴をこえた組織に成長しているのに統制できるか等々全面的に反撃された。とくに総評常幹の提案は統一戦線に関する大会決定違反ではないかと追及されて、これ全再確認する答弁が役員からあったが、彼らは三派排除はこれと矛盾しないとの詭弁でおしとおした。

総評中央は三月十五日の大会で反戦改組を決定するものとみられ、これと前後して、大阪総評でも拡大幹事会をひらきこの提案が再びむしかえされるものとみられている。各反戦ではこの反革命的提案を葬りさるために、労組に対して活発な働きかけをおこなっている。

大阪の地区反戦と労組青年部は、この問題について次のように語っている。（関連記事三面に掲載）

学生との共闘守る

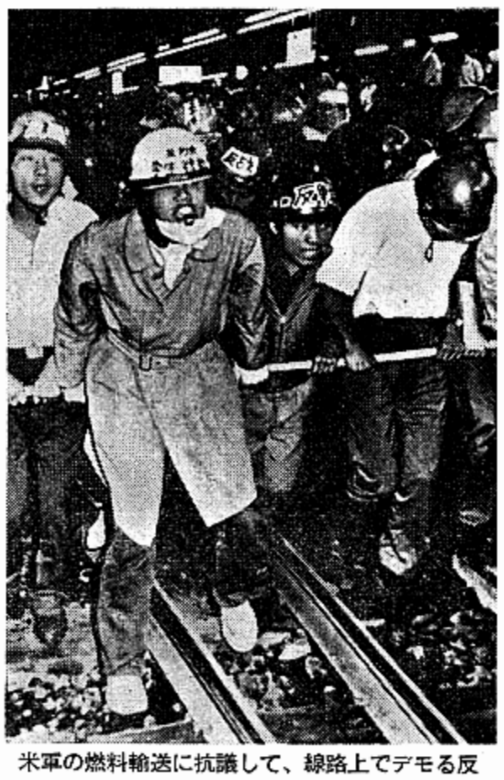
町田大阪市職青年部長

市職青年部は総評の方針をいままで忠実に実践してきた。青年労働者を多数結集し、大衆行動にも積極的に取組んできた。この方針を転換することは、大阪総評のわれわれに対する背信行為である。反戦改組が七十年闘争をいかに闘うのか全然構想がないままだされたその意図について、われわれは大きな疑問をいだかざるをえない。また総評はいままでの反戦がはたしてきた役割について全然総括をしていない。いうなれば総評のやり方は、理屈ぬきの問答無用切捨御免だ。

現在の反戦＝政治闘争を担っている青年労働者は、能動性と自主性の精神にもえて運動を展開している。この気持を全然理解しようともしていない。これでは総評は自分で自分の首をしめるようなものだ。現在の労働組合運動のなかで、機関決定を職場でいろいろなサボや妨害と抵抗し断固貫徹し、まがりなりにも労働運動を支えている部分とは、この反戦に結集している労働者ではないのか。反戦改組とは、この労働者たちを労働運動そのものからはしきだそうということだ。

三派・革マル系「排除」とは、これを提案した主観的意図はどうであろうと、現在では民青のゲバルトを認めることになる。結局、総評は民青のゲバルトに頼ることになるという厳しい現実を、総評常幹はどのように認識しているのか。思想によって差別し、統一行動から排除するというのは、労働者の論理ではない。資本の論理だ。

全大阪反戦の場でわれわれは三派系の学生の諸君たちとも討論して、新しい運動をつくりあげてきた。いま東大全共闘がなげかけた課題を労働運動でどうとけとめるかが、われわれにとわれている。権力はここにくさびをうちこんで分裂させようとしている。労働者と学生はいままで一応分業のかたちで闘いをくんできたが、学生の戦術エスカレートと権力のはげしい攻撃のなかで、両者の関係に新しいアプローチが必要となっているとおもう。学生諸君とこの七十年への戦線構築について、さらに討論をかさねて反戦闘争を発展させたい。職場に政治闘争の主体をきづき、強くしていくことが決定的に重要なときとなった。



米軍の燃料輸送に抗議して、線路上でデモる反戦の労働者と学生たち（68.10.21）

大阪 総評に再検討要求

14日 全大阪反戦が声明

私たち全大阪反戦青年委員会は二月十日、大阪総評にたいして懇談会開催の申入れをしていましたが、私たち当事者の見解を一度も聞かれることなく、全大阪反戦青年委員会の実質上の改組の方針をうちだされたことを深く悲しむものであります。ここに、私たちがこれまでの代表者会議で満場一致確認してきた見解について明らかにし、大阪総評が反戦闘争と反戦青年委員会の大衆的・戦闘的強化の方向を再検討されるよう声明します。

一、全大阪反戦青年委員会は、一九六五年九月に、地評青年部・府青協・社青同ならびに府学連の四団体を中心にベトナム反戦・日韓条約批准阻止を闘争目標とする、青年労働者、学生の共同闘争組織として結成されて以来単産青年部・産別職場反戦・地区反戦・青年同盟・高校生組織など約五〇団体を結集して、文字どおり、一九七〇年闘争をたたかう反戦反安保戦線の青年学生共闘として発展してきた歴史についての正しい総括なしに、全大阪反戦青年委員会の「改組」をかるがるしく決定することはできない。

二、全大阪反戦青年委員会は、これまで大阪地評大会が何度も確認してきたように、思想・信条・戦術上の相違をこえて要求の一致にもとづく広い府民の共同行動という原則を、ひとみのように堅持し、この原則にもとづく労働者・学生・市民の共同闘争を発展させてきた。全大阪反戦青年委員会に結成当初からも加盟している、いわゆる「三派系」学生団体をふくめ、方針の相互提起・相互討論・相互確認と行動の留保権を尊重して、かずかずの共同闘争をつみあげることに成功してきたが、特定の思想や団体の恣意的排除を絶対的前提とすることは、大衆運動をみずから分断することになり、学生諸君の真剣な行動力を反安保戦線から放逐し、保守反動政府をよろこばせる結果になるであろう。

三、反戦青年委員会への団体加盟を積極的に推進することは、まったく賛成である。しかし「個人加盟」を否定することは誤まりである。なぜなら、全国大阪職場反戦・大阪市職反戦行動委員会・反戦大阪教師の会などの産業別職場反戦は、単産・単組の反戦闘争を不断に下部末端から強化する活動家集団として、ともすれば機関決定のみにもとづく組織動員の弱さを補強する役割をはたしてきている。また地区反戦が単組・分会青年部や職場反戦を軸に、再編強化されなければならないとしても、総評以外の未組織青年労働者や高校生に対して、あらかじめ門戸を閉ざす必要はまったくないであろう。

四、いま反戦青年委員会の運動と組織にたいする国家権力の弾圧と一部マスコミ機関の中傷が日ましに高まっているとき、総評をはじめとする諸団体・個人が討論を大衆的に行なうことを提起し、全大阪反戦青年委員会の体もそれに積極的に貢献することを、ここに明らかにするものである。

地域に政治部隊を構築

北大阪反戦運営委員会

中央総評と大阪総評が反戦青年委員会を何とかしておさえこもうとしているが、これによって態度決定をせまられているのは反戦ではなく総評の方だ。われわれは総評の路線とは別の次元から自立的運動をつくってきた。それが成長し、総評がすでに無視しえなくなり、態度決定をせまられているというのが事態の本質だ。総評はいま階級闘争の側に立つのか反対するのか、どちらの立場に立つのかを反戦と全学連からつきつけられている。

①労働者階級が階級として形成される資を反戦の街頭闘争のなかから獲得してきた。地域における政治部隊の構築が必要な理由は、支配の統治機構が末端にまではめぐらされた結果、階級闘争が政策に対する闘いだけではなしに、機構そのものに対して、中央・地域で闘わなければならなくなったためである。地域に根拠地をつくってはじめて、そこから生産点へ介入することができる。労働者評議会（ソビエト）的なものが地域政治闘争の環となるだろう。

②この間の秩序そのものに反対する闘争は学生を中心に進行している。反戦はこれとの実体的な結合をとげないと、これ以上学生運動も発展できないし、反戦の政治闘争の質も高まらない。

③地域闘争は中央権力闘争に導かれてはじめて発展できる。

以上が反戦闘争の現段階の特徴であるが、今後の方向性は—

(イ)反戦の組織的自立体制を強化する。地域的結集を軸にして産業別に横断的に結合した政治部隊をつくる。

(ロ)地域政治部隊を軸にして職場生産点へ介入していく。自立的な職場活動家集団は産別反戦の一般的強化だけでは達成されない。地域を媒介にした、集団相互の結合が必要である。

(ハ)現在の独権的支配といわれる権力の攻撃の正体を構造的に暴露するために、全人民的政治闘争と中央権力闘争をおこなう。

(ホ)生産点実力闘争では現在運動は発展しない。個別企業の合理化は労務、管理機構もふくめて国家の帝国主義的再編の一環として形成されている。この国家再編の総体に対する闘いは、賃金、合理化権利等々の集合としてあるのではなく、支配機構総体に対応しうる活動家集団によって担われなければならない。

機関に依存した活動はむづかしくなっており、急速に分解せざるをえないだろう。これからの運動は大衆性ともに、自立した組織性を必要としている。

われわれは七十年闘争を闘いぬくために全大阪反戦を支え、いわゆる「ひらかれた統一戦線」を防衛し、困難な立場におちいった産別反戦破壊の陰謀とも闘って、これを守り、総評青年部を戦闘的部分によって強化していこうとしている。

敵階級の悪質な陰謀

北摂反戦青年委員会

安保粉砕闘争の内実をつくりあげてきたのは、総評でもなければ社会党でも共産党でもない。それは全学連と反戦だ。多くの労働組合幹部が七十年闘争に闘えず、支配階級に屈服している現状で、われわれは労働運動の右傾化と闘って、安保闘争を担わなければならない。

反戦は七十年安保を闘いぬく決意をもった部隊として、労働者を結集してきた。この部隊は団体・組織加盟を併用し、柔軟な形をとってつくられ、職場・地域の実情にあった組織形態をとって発展してきた。とくに個人加盟を中心に組織されている地区反戦は、総評に限らず、同盟、JC、未組織の労働者を結集し、地域で反戦＝政治闘争をたたかう重要な母体となっている。この地区反戦の活動によって、職場に反戦組織がいま根をはってきている。それは地区反戦に結集する労働者が、職場で仲間の信頼をうけ、彼らを中心にして戦闘的労働運動が形成されているからだ。

総評が地区反戦を組織加盟に改組することは、反戦闘争と労働組合運動をともに支えている労働者を、それらのなかからしめだすということであって、労働運動の右傾化をさらに促進させるものだ。これは資本と労組右派幹部の反動ブロックを強めるだけであり、労働運動の自殺行為である。

反戦改組を主張する連中は「反戦をつよくするため」だともっともらしい理由をつけてだしているが、これは反戦を弱めるための、安保闘争を失敗させようとする、敵階級の悪質な陰謀である。この動きの震源地がいままで反戦に一貫して反対してきた共産党と右派幹部であることからみて、それはっきりしている。この陰謀をみぬいた反戦派は、多数の労働者の支持をえて、この策動を断固粉砕しなければならない。

69春闘勝利・70年安保粉砕

全大阪青年労働者決起集会

三月十日（月）午後六時
大阪中央公会堂
主催 同実行委員会（全電通、全逓、国労、市職、市従、国際電々各青年部）

労働者と学生運動

座談会　東大闘争を語る

大胆な発想の要求　反体制闘争を提起

司会　東大闘争を労働者が日本の革命運動としてどのように学ぶかということについて"新左翼"としてこの問題を鮮明にしたいと考えます。

いまニューレフトの各誌とも学生の闘争をもちあげているのですが、あのもっている限界とか、問題について必ずしも明確にしていないし、しかももち上げてはならないことをもちあげているように思うし、批判しているにしてもまちがった批判をしている点が多いように感じます。

東大闘争をはじめとする学生闘争が日本革命にどのような意味をもつのか、それからあの闘争をさらに発展させるためにはどのようなことがこれから必要になってくるのかという問題について討論をすすめていただきたい。

A　あの学生運動は徹底して大学側と対等でないところから出ている。大学側は、たとえ全学連といえども学生の要求を認めず、交渉に応じない。やっと交渉に応じると昔の飯場の親方みたいに人間あつかいをせず"木で鼻くくった"ようなことをいう。学生はストをすると高い授業料を払って損をする。大学側は痛くもかゆくもない。だから対等になるためにはやむにやまれず封鎖とか、バリケードを築くことになってきているのではないか。はじめは自然発生的で、理論づけはあとからになっているようだ。

B　学生運動は学生としてかたまり、外に出ていく発想がないように思う。何のために封鎖するのかといえば、やはり、市民を運動の中に導入するという目的をもっていると思う。自分たちの闘いに支援は求めても、この闘いをひろげるという形になっていない。

C　学生の条件と情勢でやっているものを、労働者にうつしうえようがないのではないか。別個な形で別個な闘争をやりながら、全体として影響しあう要素のものだと思う。

D　労働者として学ばなければならないことは要求の問題だろう。僕らの学生時代の感覚といえば、寮にいるものは、家を離れてきているのだから、食費やガス代を出してあたり前ではないかと思っていた。ところが今の学生の発想は学校で勉強しているのになぜ電気代をとるのや、メシを食うのになぜ金をとるのかという。このような大胆な要求をみんなに明らかにするという点は、労働運動の中で一番ぬけている発想ではないだろうか。このような発想方法は学ばなければならないと思う。

しかし、東大の人だったか新聞に、労働者の"職場主義"について書いていたが、千円賃金が上るのも、大学の構内に便所が一つふえたのも、それは同じことだといっている。すると僕らがいつも真剣にやっていることは意味がないのではないかという気にもなるのだが……。改良闘争に対するオールル・オワ・ナッシングというとらえ方には断絶を感じる。

教師の場合、教師がどれだけ子供たちにちゃんとしても、しょせん子供たちにとっては波になる。だからといって大学の教授のようにやめるわけにはいかないし、教師の自己否定とは一体どういうことなのかということになるが、普通の労働者は、自らの労働が完全な疎外感をもっている。しかし教師の場合は、生徒に良いことをいってたら疎外労働とちがい、実のある労働だというのが代々木、民同、構改などの見方だ。これに対して自分たちの労働自体がやればやるほど体制に奉仕する労働だというのとの対決になっている。といっても毎日学校にいって給料をもらっているではないかということになるが、これをどうするかという点、やはり労働者としての権利の徹底な主張、それにもとづく現在の教育体制との対決、徹底な秩序破壊しかないのではないかと考える。

E　ある組合で、会社で何ボくらい出せるか、その範囲からみて何千円くらいの賃上げ要求でいこうか、という討論をしていた。

これはここの組合だけでなく、他のすべての組合に共通していることだと思う。今の労働運動は資本主義体制、合理化体制を維持するために資本家の金銭的な譲歩、労働者の権利の譲歩というワク内の闘争になっている。

どんなに小さな権利でも闘いぬくのだというところまでいっていない。その点で学生の闘いの中から労働者としてとらえなければならない問題があると考える。

"改良、妥協はない"　労働運動とのちがい

司会　労働運動というか、労働者の闘いとの関連が問題だと思いますが、労働者にあたえた影響、それをどう生かすかなど、すこしつっこんでいただきたい。

F　労働者の闘争というのは要求を出し闘いをすすめ発展させ、ある段階で妥協し、妥結する。学生の闘いは労組の妥協までの過程を経てはいない。まず最初から一切の権力体制を否定し、破壊しつくしてしまうというのだから、学生たちの闘争の中には改良とか、妥協とかいう字はみあたらない。ここから労働者の闘いと、学生の闘いの違いが出てくるのだ。

そうであるにもかかわらず、学園闘争と労働者の闘争を連帯させなければいけない。

C　いまの形の春闘を、とくに日本にある企業別組合に組織された形で闘争を、何度くり返しても体制を覆し、革命へと自然成長的にいくということはない。

大学改革の要求を民青の主張するような"おねがいします""頼みます"というような形で闘っていては、大学改革がこれだけ大衆のものになっていなかったろう。やはりゲバ棒と封鎖があの高揚を切り開いたし、自民党から一般大衆にいたるまで、大学は改革されなければならないものとして提起したのだ。これは破壊闘争の一つの勝利だと思う。

ただ破壊という決定的な闘争をやりながら、改良の問題を前面に浮き出すことができたのは、今の情勢の中で、大学・学生がおかれている状態と条件にある。

今の教育を民主化しようとすまいと、学べば学ぶほど、今のマスプロ教育そのものが資本主義体制をささえる基礎を作っていくという矛盾に逢着して、それを大学改革という要求にこめて、ゲバ棒という形で行動にあらわす、そのことによって問題を全面に引き出すという効果があった。これは労働者の要求とは直接結びつかない。しかし、この闘いをすすめることと、労働者階級が自らの要求をやがて体制の問題として考えることに至ることとは矛盾しない。

そこへどのようにすすめていくかということが課題だ。

労働者が自らの要求から出発する、改良から出発するからといって、別の条件にある学生が改良を出発としなければならないということはないと思うし、またそのような思考、発想方法をとっているかぎり革命的爆発というのはない。

学生のあの行動は一つの起爆剤であり、労働者階級の要求を革命的にたかめていくと思う。条件のちがうところで、体制とは何か、秩序とは何か、というものを糾弾する闘争がやられているのをどう生かすかということだろう。

B　労働者の発想として、学生がいまやっているような破壊が受け入れられるかどうか。労働者と学生の条件がちがうということではなくて、発想に問題があるように思う。封鎖したり、つぶしたり、なぐりあったりの破壊だけであとの構想が何もないのではないか。あのような行動が労働階級を中心にした強力な統一戦線の力量によって、根本的に革命に至るまでの過程でどういう役割を負うのか、ということが明らかでない。

C　それは客観論ではないのか。たとえば中国の五・四運動だがあの場合労働者の統一戦線がどういうことからはじまったのでなく、学生のもっている状態と、もっている政治条件からこれを爆発させていくという形で社会の起爆剤となり、労働者の要求を民族的、政治的な諸要求に発展させていくという可能性、展望を開いたのだ。はじめから展望があってそこにいくのでなく、自らのおかれている諸条件で、要求を爆発させ闘争を展開することによって展望を切り開いていくのではないだろうか。

G　体制が悪いというが、職場で働いていると、職制から組合から会社からしめつけられているのであって、千円や二千円の問題だとり上げるかも知れないが、本当にストなどやろうとしたら組合がまずつぶしにくる。労働組合が抱きかかえられてしまっているのが全体のうごきだ。

方針が一枚出れば労働者の意志がかわるとか、一晩話したら意志がかわるというほどいまの体制は弱いものでない。

たいていの要求だと民青は「民青に入りなさい。数でいきましょう。数でいけば要求が通るのも早いです」という。小さいことだとそれは早いかも知れない。このような状態になっている。

そこへ、一度に学生の闘いを労働者の中に波及し、労働者がそれによって方針を明らかにしたら思想的にめざめ、断固と闘うというようにはならないと思う。東大の闘争でもモタモタしながら、一年間のストをやってきて、だんだんまとまり、闘っているのだ。いまも内部でケンカしたりしてモタモタしているが、そのような運動の状態というのはあると思う。その見通しをどうたてるかの問題で、そのような状態であかんというのか、そのような状態が続くことによって前進していくのかという、大きな見通しをたてる必要がある。

たとえば国鉄労働者がストをする、お客さんが運賃値上げ反対をやっていたとすると、これと結合したら市民共闘だというけど、そうはいかない。労働者はお客さんの運賃を安くするためにストライキするだろうか。

ただ組合幹部はスローガンに「運賃値上げ反対」と入れる、そしたらお客さんが支持してくれるということで入れているだけで、国鉄労働者は運賃値下げのために自分が賃金カットまでされてストライキするより、運賃上げて賃金上げてくれていうのが本音だと思う。

労働者が本当に資本と対決して資本を守っているのは権力であると意識したときにはじめて、学生は本当にやったんだということがわかり、連帯感が生れるのであって、それ以外は理屈でしかわからない。

僕たちは学生運動の評価と同時にそこに流れている政治思想というものの評価を、われわれ自身の問題としてはっきりとすることが必要だろう。

それを学生運動一般にしてしまうと労働運動一般になってしまう。そうではなく、そこには政治思想の問題が提起されていると考えるべきだ。

F　いま、全学連と反戦の反帝戦線を強化せよ！のスローガンがでているが、闘う部隊は反戦と全学連しかないのだという発想なんですね、労働者はおれたちについてこいという、そこには労働者軽視がみられる。

反戦の集会などにいって"反戦は全学連と共に闘うぞー"というシュプレヒコールがあるのですがそれには抵抗を感じる。いま労働者の中に学生の闘いをストレートに入れようとする空気がある。

すべての反戦は東大へといいますが、職場を放棄してまで守る価値があるのかどうか……。東大全共闘のアッピールや、各セクトから出している要請は、東大が日本革命の最頂点みたいだが……。学生が労働者の闘いを支持して……の方向には出ようとはしていないですね。

そこに反戦を組織している各セクトの姿勢がみられる。

自己否定の思想　自己肯定をつきつめた所に

司会　東大闘争は一つの問いは出したと思います。その問題提起は花々しくすばらしいものですが、学生が出そうとした回答が回答になっていないように感じます。われわれがおぼつかないような問題提起をしたけれども、それを解決する道すじが明らかでない。それをどう正しくうけとめるかということと、いま自己否定ということを問題にすべきだと考えますが……。

H　労働者のレクレーションなどすべてが、体制のワクの中でしかやれていない。体制のワクから出ているように見えても、結局はレジャーにしても何にしても、体制のワクの中に仕組まれていると感じさせられる中でレジャーを楽しんでいる。

人間というのは本来そういうものでない、ということを根底にすえ、現在の作られた体制の中での自分の存在をはっきり認識した上で、そこから出た闘い、運動をしていくというのが、学生の自己否定の考え方だと思う。自己否定というのは自分の内的な変革というか、思想の問題をいっていると思う。

A　学生運動の最初の要求は青医連を認めよとか、不当処分反対とかいうようなものだった。そんな要求すら認められないほど、今の大学は前近代的な機構である。それが民主主義の名のもとに運営されていた。その仮面がはがされ、あそこまで闘争を発展させたのだと思う。

自己否定という言葉が出てくるまでに、すでに一年間の闘いがあり、大学の変革を通じて、社会全体の変革が提起されてはじめて自己否定という問題がでてきた。

社会全否定していて自分が肯定されるはずがない。社会全否定するということはその中に存在していることによって得られるすべてを否定するという考え方に通じてくる。学生が提起している自己否定というのは、社会を変革していかなければならないと思う人、いわゆる革命家が自分自身としてやらなければならないものとしての提起だ。

だから自己否定は先覚者の意識だ。これがすべての学生運動の中につらぬかれているとはいえないだろうが……。

しかし、運動の発展というのは自己肯定からでないと、要求も出ないし、進まない。だが自己肯定がつきつめられて行くと、社会変革と自己否定がともなわないと、その肯定すらなし遂げられていかないということになる。

革命というのは、改良を積み重ね、肯定だけを積み重ねておれば社会が変るということではなしに社会を変革しようとするなら、ある瞬間には社会も、自分もすべて否定しきる段階がくるという問題として提起していると思う。

その過程、つまり、自分を徹底的に肯定して行こうとしたところが、否定に到達したという"法則"を学ぶべきだろう。そういうものとして自己否定をとらえていけばよいのではないか。

I　労働組合というのはもともと体制的に作られている。

終戦後のような、非常に特殊な場合だと、革命的になることもあるが、一般的には体制的だから、自己否定すると空中分解してしまうのは当然の結果だ。

学生の自己否定は、自分をいためつけるということではなしに、就職のメドを断つということによって支配階級になるという道を否定しようというものであって、いいかえれば支配階級への自己否定という形でなりたっているのではないだろうか。

必らずしも体制えの自己否定、いま立っている時点の自己の否定という、すべてのものをかけた自己否定でないと思う。

体制、反体制を分る　東大闘争をつきつけて

司会　いまの学生運動は学生運動としてだけで、評価できない面があるとおいますが……

A　いま学生運動ということで一般化されているけれど、そこに、すべての新左翼諸組織が政治生命をかけていると思う。

闘いが学生運動ということでしか出てこないところに、新左翼の弱さがあるわけだろうけれども、学生運動の中で何か典型をつくりたいと一切をかけ、その典型を労働者の中へと考えている。

"現代の眼"三月号などで批判しているけれども、いまさかんに出ている解放区理論、ソビエト理論、羽仁五郎の都市連合論など、革命の形態論がいまどっと提起されてきていると思う。

その提起されている構想のもとに今度はもう一度闘いが組まれてきている。

神田解放区の問題はじめ、その他の問題が革命をめざす政治路線として提起されているし、学生運動ということではなく、政治思想として提起されている。

僕らは学生運動の評価と同時にそこに流れている政治思想というものの評価を、われわれ自身の問題としてはっきりとすることが必要だろう。

それを学生運動一般にしてしまうと労働運動一般になってしまう。そうではなく、そこには政治思想の問題が提起されていると考えるべきだ。

F　いま、全学連と反戦の反帝戦線を強化せよ！のスローガンがでているが、闘う部隊は反戦と全学連しかないのだという発想なんですね、労働者はおれたちについてこいという、そこには労働者軽視がみられる。

反戦の集会などにいって"反戦は全学連と共に闘うぞー"というシュプレヒコールがあるのですがそれには抵抗を感じる。いま労働者の中に学生の闘いをストレートに入れようとする空気がある。

すべての反戦は東大へといいますが、職場を放棄してまで守る価値があるのかどうか……。東大全共闘のアッピールや、各セクトから出している要請は、東大が日本革命の最頂点みたいだが……。学生が労働者の闘いを支持して……の方向には出ようとはしていないですね。

そこに反戦を組織している各セクトの姿勢がみられる。

G　学生の闘争を支持するかどうかということで、反体制側になるか、体制側になるかという二つに分かれると思う。文句はある、やり方はわるい、しかし気持はわかるという支持から、やり方もふくめて支持というのもあれば、本質的に駄目というのもあるが、支持か否支持かという形でしぼっていかないと整理のしようがないのではないか。

部分的に欠陥があっても支持するのか、部分的欠陥があるから、目的が正しくても手段が悪いから支持せんというのか、そこのところの論点を明確にしていく必要がある。

全共闘はわからんが、警察に頭なぐられたからおれは支持する、というのも反体制、おれの交通違反をとり締ったから、巡査のすることは何でも反対やという人もいると思う。

大きなところで線を引いていかなかったらいかん。

E　職場ではマスコミにのって暴力は悪いというのもいれば、安田講堂の闘いに拍手かっさいのヤジ馬精神もあった。本来ヤジ馬精神とは革命的、階級的でわれわれはここに依拠しなければならないと思う。

H　これからあの学生たちは新しいエネルギーを求めて労働者の中に入るだろうし、今の学生運動自体がなげかけた問題は、労働者に影響をあたえるだろうが、そのようなものが労働者の階級的な意識社会主義意識、反体制意識を作り出していく仕事になると思う。

労働者は自然発生的に反体制意識、政治意識をもつものではない。やはり、外部から注入しないかぎり駄目だ。

それは社会主義の講義を受けることだけではなく、大学とは何か大学とはブルジョアジーの道具ではないのか、という問いかけを出す、その鮮明な行動自体が、労働者階級の中に多少なりともそのようなものをうつし、広げていくということだと思う。

"新左翼"紙としては、東大闘争の出している問いかけを広げることと、民青・日共（代々木）を糾弾する二つの任務を果してほしい。

（司会は編集部）

風雨ついて〝吹操〟へデモ
軍需輸送阻止呼かけ
反戦六団体共同で取組み

十六日午後より、吹田反戦、全摂津反戦、北摂反戦、高槻反戦、北大阪反戦、東淀川反戦で構成する六地区反戦青年委共闘会議は吹田市の高浜神社で〝吹田操車場軍需物資輸送阻止・軍需生産阻止青年総決起集会〟を開いた。

集会には六地区反戦青年委の呼びかけに応えた青年労働者・学生百五十名が激しい雨をついて結集した。東淀川反戦代表から、昨年十二月に東淀川と全摂津反戦が共同してダイキン工業の軍需生産阻止闘争をくり広げるなかから六地区反戦の共闘をくむことのできた経過報告があり、続いて各地区反戦、学生代表が吹田操車場の軍需輸送を糾弾し、今年の春闘と結合して職場・地域の下部からの闘争を組織し、軍需阻止のため断固闘うと決意表明があり、雨の中を国鉄吹田駅までデモを行なった。

なおこの集会に連帯のあいさつをした全大阪反戦健山事務局長は十三日の総評幹事会の〝三派系学生の排除〟と〝反戦の改組〟の問題について、①大阪総評幹事会の決定は三年半の反戦の役割を否定するものであり、自らの指導こそを総括すべきである、②反戦青年委は共同闘争の原則はずっておりこの三派系排除は共同闘争を困難にするものである、③反戦から個人加盟をなくすることは反戦が職場闘争に貢献してきたことをみていない、④全大阪反戦は今後闘争を発展させるため、総評幹部と討議を積重ねていく用意があると語った。

「いずれ死文化する」
豊能反戦青年委員会

大阪総評は反戦運動を自分の統制の枠のなかにおさえこもうとしているが、われわれは突破できるし、いずれ死文化するだろう。われわれは総評の手をかりずにいままで新しい運動を作ってきたし実績をもっている。

総評常任の決定は—

一、思想を理由にして統一行動から排除するというのは統一戦線の原則をふみはずしている。

二、個人加盟を否定することは個人の自発性、創造性に依拠し、これを引だして発展させるという運動論からはずれている。

三、反戦運動に関する何の評価もなしに結論をだしている。

という点で、われわれは反対だ。

われわれは総中地協と協力し統一行動をすすめてきた。その闘いの前進のなかで三派排除を死文化してきた。反戦は反安保実行委員会に加盟し、このなかで積極的に運動をになうことによって、地域で運動をすすめていくことは可能だし、このことによって反戦は地域に政治的影響を拡げることができる。

総評は一方で反戦を統制し、他方で、単産単組の青年部に反戦に加盟せよといっている。われわれは、単産単組青年部の団体加盟を積極的に歓迎する。われわれもこの決定を逆手にとって職場反戦の組織を広げていきたい。

(一面の関連記事)

〝ベトナムと70年〟
愛媛　討論集会開く

【四国支局発】「わたしたちのベトナム反戦の運動は、当然のことながら、七〇年安保の問題をさけて通ることができなくなっています。六〇年安保とはずっとちがってきた七〇年安保とは何かを考え、何から行動したらよいかを、それぞれの立場から、自由に、率直に発言し、特定の結論を出すのではなく、意見を交換したいと考えます」という主旨のもとに「〝ベトナム反戦と七〇年安保〟を考える集会」が、おこなわれた。

これは、新居浜べ平連結成準備会の呼びかけによるもので、二月十五日午後五時から、新居浜市民文化センターに、高校生、学生、労働者、漁民、市民など約五〇名を結集して開かれた。

集会は〝ベトナム反戦と七〇年安保について〟の主報告を、特に招かれ参加した、兵庫県尼崎地区反戦の川島議長がおこない、愛媛大学反戦会議、同べ平連の各代表の活動報告があって討議がおこなわれた。

討論は、徳島から参加した学生もまじえて、ほとんど全員が発言するという盛り上った雰囲気で続けられ、この集会の成果を後へ残すため、当面、新居浜べ平連結成を促進することが決定された。

この集会に参加した一労働者は「こんなに自由にみんなが話し合える集会は始めてだ。これからもどしどし、こんな集会をもって、討議を深め、行動をおこし、四国での闘いを前進させたい」と、目をかがやかせて語っていた。

救援カンパを
関西学院全共闘が訴え

二・六以降「六項目要求実現＝全学封鎖貫徹」のスローガンの下敢闘的「入試」実力阻止の闘いを機動隊との熾烈なゲリラ戦をもって展開してきた果敢なる学友諸君！

資本主義社会の存亡を規定する〝大学〟における叛逆・内乱によって現存社会体制を根底から揺がした東大・日大闘争に連帯した同質性を保持せんと闘い抜いた、関学闘争を注目し支援と連帯の決意をその内にひめている先進的労働者・市民の皆さん！

法・五別館の死守！　それは決死隊四十八名のみのものではなく全ての〝六項目要求貫徹を闘い抜いている者〟の共同意志である。

僕たちは建物としての塔、物体としてのバリケードを防衛しようとしたのではなく、全学封鎖スト貫徹の闘いを通じて、自立せんとした思想の拠点・塔の死守であった。であるが故に、逮捕された学友は物理的には〝停止・制圧〟された時闘性・空間性の中で、逆に鋭どく〝思想的闘いを〟強いられその重荷を耐え抜いている。その闘いに連帯する僕たちの行動が何であるべきか！

機動隊・学院権力によって放逐されんとした暴力的企図に対する

△物理的抵抗＝5G塔死守・学園奪還・機動隊との激突▽は同時に

△思想的抵抗＝既成の管理支配秩序体系の全面的拒否・現行管理機構からの「独立」・自立集団「全共闘」の形成▽に支えられたものでなければならない。入試実力阻止＝機動隊の入試防衛線突破という原則点をふまえて、総計六十六名（二月十二日現在）に達する大量逮捕を出してまで〝死守〟し〝突破〟せんとした関学における〝反権力〟〝反国家〟〝自己変革〟の闘いが切り開いた地平に自らを投企し、結合させねばならない。

全ての先進的学友諸君！　制約された状況・劣悪なる〝法〟の鉄鎖の中で闘っている学友への物質的・精神的救援を！

法・5Gにおける戦闘でほとんど全ての学友が負傷し、なかには機動隊員の狂気じみたリンチでロもきけず、伏したままで取り調べを受けさせられている学友もいる。強権的弾圧の中で更に闘う学友を捕逮せんと狙っている〝法〟の乱用・悪用者。僕たちの親愛なる学友は肉体的打撃と強曲されたデマによって、消耗な苦渋にみちた闘い＝〝完全黙否〟を展開している。食費、治療費、雑費……多大なるカンパを！　各自の余っている衣服を！

裁判闘争を耐えぬく資金カンパを！

カンパ送り先

神戸市東灘区本庄町青木大倉72－14　山本方　久世恭子気付　関学事件救援対策学生本部

金沢市で700人の抗議デモ
自衛隊機の市民殺傷に

金沢市内を行進するデモ隊

さる八日金沢市内に自衛隊機が墜落し、市民四人を殺し、十八名に傷をおわせ全焼十四戸をふくめて、一五〇戸に被害を与えたことに憤激し、現地では八日以後労働者・学生たちの激しいデモがくりひろげられた。十日夜市内中央公園で石川県反戦青年委員会主催の「安保粉砕・小松基地即時撤去」集会がひらかれ青年労働者、学生約七百人が参加した。

デモは墜落地点の星二丁目までおりかえしておこなわれたが、県道交差点では、犠牲者を悼んで黙とうし、さらに県庁前で十五分間道路上にすわりこみ抗議した。市民が多数見守るなかでおこなわれたこのデモは終始戦闘的で、ジグザグをくりかえし、スローガンは市内の目抜通り一杯にこだました。警察の弾圧によって二名がデモの最中負傷した。同夜、日共代々木派の学生たちも二五〇名あまりが市内をデモしたが、地元新聞によると「ジグザグはみられず、警官も先導などに数人でただけ」の静かな行進だった。

投書

名実ともに素晴らしい

前略、安保粉砕・日帝打倒（もちろん、米帝・ソ修・日共修も）を目差して闘っている一学生です。

貴社発行の「新左翼」の見本紙を検討した結果、名実共に素晴らしいということがわかりましたので、購読させていただきます。

これからもどうかよろしくお願い致します。

お互いにがんばりましょう。では。　福岡県　学生

読書新聞で見た見本紙送れ

拝啓

今回、日本読書新聞〝夜行便〟の記事より貴社発行紙を知りました。田舎者ですが、ぜひとも拝読致したく思いますので、見本紙一部ご送付願えれば幸いに思っております。

まずはお願いかたがた、お伺いまで。　草々

山口県　H・K

紙代とカンパをおくります

前略、新聞のご送付をつけながら、すっかりご無沙汰して申訳けありません。とりあえず五百円同封してお送りしますから、三百円を半年分の紙代に、あとはカンパとしてお受取り下さい。

七〇年闘争をひかえた今年、なにかと多忙だと思いますが、お互い元気にがんばりましょう。　愛知県　T生

意図には同感方向の指示を

前略、なかなかよい紙面になってきましたね。ご努力に敬意。意図には全く同感します。

新聞の機能には二つある。ニュースと意見（そして指導）だ。客観的なニュースとともに、批判とその立場からする方向指示が、貴紙にはもっとあってよい。

今年は酉年、貴紙は風見鶏になれ。　大阪　M・S

組合運動の参考になる

機関紙「新左翼」は組合運動について非常に参考になります。今後続けて購読したいので送って下さい。　福井県　一労働者

読者の拡大に協力する

ノンポリラヂカリストとして、連帯の挨拶を贈ります。来月ごろから少し活動に余裕ができますから、読者拡大カンパニアに協力できると思います。　岡山県　T生

カンパを送る共に頑張ろう

前略、連日のご奮闘に対し、心より敬意を表します。東大の闘いを成功させ、六九春闘を突破口にして、七〇年安保の全面勝利を目ざして、ともにがんばろう。

わずかですが、カンパをおくります。　長野県　反戦青年S

「新聞一本に」の意見に賛成

「新左翼」よくできた機関紙と思います。内容があり、宣伝紙・大衆紙の域を超えている点、読者としては勉強になってありがたいです。ご発展を祈ります。

二月五日号、私の発言「新左翼の新聞を一本に」も卓見と思いました。全くお説の通りで、かつ私のふだんの気持も明瞭に代弁された思いです。

時局きびしき折柄、編集者の皆様のご自愛を祈っています。　三重県　一読者

看護婦さん求む！

正看・准看いずれも若干名

反戦運動に関心のある方歓迎

連絡は新左翼社まで

分裂の嵐の関頭に立って

敬愛する同志諸兄の

ご支援を強く訴えます

今回私たち広機労組で、分裂主義者と会社職制の一体となった悪質で謀略きわまりない分裂攻撃が加えられ、第二組合が結成されました。この嵐のような混乱と流動の中で、踏みとどまった広機労組の旗を守り抜こうと立ち上がった私たちは、寝食を忘れて日夜一心不乱の活動と組織防衛を続けています。

しかし、資本と分裂主義者の汚い策動に対決するためには、不馴れと力不足によりみなさんのご鞭撻、ご協力なくしては、今後の闘いの限界を切実に感じる実状にあります。

特に、組合財産が凍結されている中では活動資金の切迫を、みなさんの貴重なカンパに訴える他にありません。

熱情あるみなさんの物心両面の支援のもと、私たちは更に勇気百倍、団結を強化してご期待にお応えすることを誓います。

三菱重工広島精機労働組合

執行委員長　政木五郎

送り先　広島県安佐郡祇園町西原一九六八—四　中村方　渕上正之

「新左翼」購読申込みと読者紹介を

下の欄に住所氏名をかいて、新左翼社までお送り下さい。送金には振替を御利用下さい。

氏　名	住　所

送り先　大阪市大淀区本庄川崎町2—10　トミヤビル　新左翼社

革命めざす ブラジル学生運動

美辞麗句はいらない

「われわれ人民の解放は与えられるものではなく、解放によってだけ勝取れるものである。……われわれの社会の根本的矛盾は労働者―農民と、帝国主義のヘゲモニーのもとにあるブラジルの支配階級との間に存在する。この闘争の基本的な力は労働者と農民の同盟である。……学生運動の基本的課題は政治闘争である。

学生運動における政治闘争の特徴は、独裁と帝国主義を告発することと、大学で独裁と帝国主義がおしつけているものに対して具体的に闘争をおしすすめていることである。学生運動は歴史的に社会を革命的に変革する立場にある階級（労働者と農民）と、すすんで同盟を結ばなければならない」（一九六七年サオ・パウロで採択されUNEBの政治憲章より）

この憲章は役に立たない美辞れい句ではない。UNEBがこの憲章を承認するために開く会議の約一カ月前、国家保安長官は国の全力をあげて会議を阻止する旨声明した。会議が近づくにつれて、陸軍部隊は高速道路を占領し、国家警察と空軍は、空港、鉄道、バス停留所を占領した。憲兵と秘密部隊は、サオ・パウロ市とその州の他の都市を占領した。

全国からきた六百名の代議員は、市から数〝はなれた地点にあつまった。政府は総力をあげたにもかかわらず、秘密会議の代議員を誰ひとり捕えることができなかった。

これらの学生たちのデモには、いつも戦車や機関銃がでてくる。確かに学生たちには根性がある。彼らはよく組織されており、政治目標と戦略について、はっきりした考えをもって活動している。

アメリカとの類似点

UNEBは、ブラジルの政治情勢と世界情勢（特にキューバとベトナム）の変化の後、この立場に到達した。UNEBの発展は、アメリカ合衆国におけるわれわれの活動と似ている点をいくつか示唆している。

国は大きく、それぞれの地方は政治的にも経済的にも異った発展段階にある。大衆運動はほとんどデモをとおしおこなわれる。学生が運動のなかで最も活発な勢力である。

学生運動は旧い左翼型の政治からつい最近脱皮したばかりである。学生の指導者は最近にいたるまで、基礎組織と結びついていなかった。

政治問題はほとんど組織問題として処理されてきた。ブラジルの左翼が権力を獲得するまでには長期の闘いが必要である。

64クーデター以前

一九三七年に学生指導者のあるグループがUNEBを創設した。数カ月後、ブラジルのファシスト、ゲチュリオ・バルガスが政権を握り、八年間つづいた。バルガス支配のあいだ、UNEBは反ファッショと漠然とした民衆主義の立場をとっていた。UNEBは第二次大戦中、連合国の側につき、数回にわたり、反ファッショデモをおこない、何人かの学生が殺された。

一九四五年から六一、二年にかけて、UNEBは基本的に改良主義であったが、政治要求を引上げてきた。UNEBは石油と鉄鋼の国営化を要求したが、企業側はこれを無視した。これらの産業は国家独占になった。

一九六一年、彼らはいわゆるスチューデントパワー型の問題―大学管理への参加、本の価格と奨学資金の安定―でストライキをうった。ストライキははじめから激しかったが、何事もかわらなかった。UNEBは一九六一年の右翼クーデターに反対して自由主義者のグラールを支持した。

この期間UNEBは、物価の安定、賃上げ、文盲への選挙権、農地改革などの改良主義的要求で、労働者・農民と同盟を結んだ。学生たちはこれらの問題で労働者や農民が呼びかけた行動に参加した。

この当時を分析してUNEBの指導者は次のように書いている。「大多数の学生の政治的、思想的自覚はどんな水準にあっただろうか。答えはかんたんである。低かった。非常に非常に低かった。指導者たちは彼らの基礎組織から政治的につきあがっていた。形式的に組織的な水準でつながっているにすぎなかった。多数の人を動員できたのは、実際、当時のUNEBがもっていた官僚主義的な管理機構のためにすぎなかった。このことは、司令部が憲兵に占領されるや、どんな型の抗議デモもできなくなり、その機能が完全に麻痺してしまったことで明らかである」

UNEBの飛躍

UNEBは、官僚主義をなくし、基礎組織としっかりした結びつきをつくらなければならなかった。UNEBは司令部をもたないUNEB-Vulante（文字通り飛行するUNEB）となった。会議、指導部内の形式的な関係、事務所まわりは、大衆集会、デモ、大衆的レベルの仕事にかわった。この新しい組織の形態は、後で大衆路線として発展する政策の始まりであった。

「民衆の文化センター」（CPC）はこの時期に設立され、全国的に文盲追放キャンペーンを展開し、反帝国主義内容をもった映画と演劇を労働者大衆にみせた。

UNEBの指導が人民大衆と恒常的な接触をつくろうというこれらの組織形態は、学生政策の改良主義的内容と対立した。人民とともに生活することによって、UNEBは社会奉仕者ではいられなくなり、革命家にならなければならないことを学んだ。

軍部のクーデターでこの教訓がいかされることになった。グラールのもとで、比較的政治的自由があったにもかかわらず、経済的危機は増大しいまにも破裂しそうになった。だれもがクーデーターは目前に迫っていると語ったが、われわれはみな弾圧の激化について語りあったーだれもそれは信じたくなかった。

改良主義者は、ブラジルのブルジョア階級が反帝国主義だと信じきっていた。クーデターの前に政治権力を階級の問題として語る人はごわずかで、ほとんどの人は革命が暴力的なものだということを知らなかった。

将軍のクーデター

将軍どもは政権を奪取ろうとしてアメリカ大使リンカン・ゴードンと大使館付武官バーノン・ワルサーズと陰謀を企んだ。彼らの軍部独裁はすべての民衆主義的法律を無効にし、経済のアメリカ全一支配へ道をひらいた。

いわゆる民族ブルジョアジーは少数の例外をのぞいて、クーデターを支持しただけでなく、それに参加した。彼らは結局民衆主義的（反帝国主義）ではなかった。クーデターは彼らの階級的利益に合致していた。これらのことは、革命か反動かの二者択一をせまられたばあいブルジョアジーは反動を選ぶという普遍的命題の正しさを証明した。

UNEBとブラジルの一般民衆は、改良主義が正しい政治路線だというブルジョア的幻想からぬけだした。UNEBは、中間階級が同盟軍になりえないことを知った。

革命的な政策

クーデターから数週間後、UNEBは非合法化され、事務所は放火された。三千人をこえる指導者たちは外国大使館に亡命するか、国外に退去するか、逮捕された。軍の首脳が大学総長に任命され、すべての政治文化活動は禁止された。

UNEBは秘密裡に再組織された。

一九六六年に戦闘的なデモが再開された。十月に各地の主要都市で起ったデモは、独裁者が企んだ茶番劇である選挙を糾弾した。翌月の選挙における八百万の白紙投票と棄権（強制された選挙で選挙権を持つ人のほとんど半数）は学生の指導したデモの政治目的――独裁と帝国主義を合法的に解決することは不可能であるーを大衆が理解したことを示した。

一九六七年二月UNEBは、帝国主義者が教育制度に浸透することに反対して、全国的な教育運動を組織した。学生たちはCIA、基金（Foundation）MITの張りめぐらされた網の目と奨学資金の管理の実体をあきらかにした。彼らはまた平和部隊のブラジル国内版であるロンドン計画が、人道主義的エネルギーを宣撫工作や教育制度の軍隊化にそそぎこませようとしていることを暴露した。

六月に高校生連合とUNEBは、アメリカ合衆国がブラジル教育制度を支配することに反対して、全国抗議デーを計画した。戦車があらゆる都市でデモに対して出動した。

この年は、デモの参加者も戦闘性もともに増加した。たくさんの施設が破壊され、一人の警官と数人の労働者が死んだ。メーデーに労働者は「武装闘争で独裁者をおいだそう」「戦って死ぬのはいいが、餓えて死ぬのはゴメンだ」「労働者、学生、農民は結集して、ブラジルを帝国主義から解放しよう」「われわれの闘争はベトナム同胞の闘いと同じだ」などのスローガンをかかげて行進した。

戦略と攻撃

UNEBはデモを彼らの戦略思想の基礎にしている。政治闘争が武装闘争への道をひらくのであり、学生が都市における政治闘争の中心になると、彼らは考えている。群衆が参加する最も暴力的な街頭デモは、階級闘争の最高の形態である武装闘争を引きだす。UNEBは次のようにいっている。「民衆の政治的自覚は街頭で高められ、また彼らは、敵に対する恐怖心をなくし暴力になれることを学ぶ」未来の人民軍はいま街頭で鍛えられている。

政治憲章は次のようにいっている。「学生は補助軍として、労働者、農民と同盟を結ぶが、共同の敵に対してはそれ自身ひとつの勢力として闘う」ここで学生の不満と革命的な階級的課題とが結びつけられる。さらに次のようにいう。「学生の不満は政治的階級闘争がものあがるのに役立つ。なぜなら学生が動員し組織することによって、大学が階級社会の産物であり、学生は支配階級の利益に奉仕するものだという自覚を高めるからである。しかし学生の不満をめぐる闘いは、より大きな政治闘争ときりはなして論ずることはできない」

ある闘いの実例

いかにして学生の不満は、より大きな政治闘争と結びつくのか。学生食堂は大変きたない。UNEBはこの不満にいろいろな方法で対処してきた。たとえば、政府に手紙をかく、改善を要求する等々。しかし学生の不満をめぐる闘いは、より大きな政治闘争ときりはなして論ずることはできない」

UNEBは直ちに街頭デモを呼びかけるようなことをしなかった。はじめ大衆集会を提案した。学生たちがこれに積極的な反応をみせた後で、学生大会にエスカレートさせ、最後にデモにもっていった。UNEBは学生の不満を政治的内容とする街頭デモに組織した。警察は暴力的に介入し、ひとりの若い学生を虐殺した。学生は直ちに街頭へでたが、そのときデモの内容は、人殺しに責任のある独裁と帝国主義に反対する革命的なものに変っていた。この戦略は成功した。UNEBは政治的自覚を飛躍的に飛躍させることができた。

大衆路線をあゆむ

大衆路線とはレーニンによって提起され毛によって発展させられた概念である。政治工作の方向を定めるにあたって前提となる有能で有効な指導者とは、彼が基礎組織の創造性に頼るときだけだということである。あらゆる革命的な工作とは、人民の要求から始まるのである。指導者は人民の上に立ってはならず、むしろ組織しようとする人民の生活のなかにとけこまなくてはならない。こうして指導者は始めて、基礎組織の思想と感情の全体を知ることができ、彼らの支持を得て、行動に立ち上がらせることができる。UNEBは大衆路線を厳格に実行している。彼らは幹部と基礎組織との間の不断の相互作用を重視しており、こうしてUNEBは人民が何をのぞんでいるかをいつも知っている。

組織的に、UNEBは官僚主義の残りをすべて排除してしまった。十名の全国理事がいて、彼らは会議をひらき、協議会で選択された政治路線にしたがって工作計画を作る。ついでそれぞれの指導者は各地区にむかって出発し、そこに十五日から二カ月滞在する。彼らは各地区で教職員たちを訪問し、講演会を開き、基礎組織と学生運動の方向について討論し、地域闘争の発展を助け、ともに参加し、地区の問題を人民とともに調査する。

こうしてから、再び理事会を開いて彼らの学んだものを基礎にして計画を再検討する。

この過程は何度もくりかえされる。

基礎組織とともにおこなう指導者のこの直接行動は、弾圧がきびしいにもかかわらず、UNEBに優れた素質を与えている。つい一カ月前約一千人のUNEB代議員が一九六八年度の大会でつかまったが、運動は破壊されなかった。全国各地で数千人が参加し、戦闘的なデモがおこなわれた。

地下活動はすすむ

秘密組織はどんな公共施設もつかわないで、大衆的デモをどのように組織するのだろうか。

UNEBを支持するあらゆる学生は、五～十人で工作戦線（Work Fronts）に組織されている。これは組織の恒久的な単位であり、定期的に会合して学生運動の政策や最も良い活動の方法について討論している。工作戦線のなかの一人は行動調整員であり、彼は大衆の段階におけるUNEBの政治的方向に責任をもっている。

デモが事前に弾圧されるのをさけるために、デモの日時だけが前もって明らかにされる。指導者たちはたえず基礎組織と接触しているから形式的な会合で協議によって決める必要はない。軍隊や警察を戦略的な地点のなかに、おかないようにするために、デモの出発点は出発するときに始めて発表される。

アカデミックセンターの部長クラスの議長たちは、デモの出発点（もし市内に多数の学生がいるときはいくつかの）を知っている。全工作戦線の行動調整員がデモのはじまる直前に、各工作戦線の行動調整員へ集合地点をしらせる。

デモがはじまる前に学生たちは、バスや映画館の列などの街頭で一般の群衆にまじっている。ポスターや棒は服の下か新聞紙にまいてかくしている。口笛、かけ声、サインまたはポスターをかかげること、何でもデモの出発の信号となる。こうしてデモは一見して、自発的にみえる。

デモの場所は注意ぶかく選定される。それは中心部に近くて広く、常にいろいろな活動がおこなわれている大通りでなければならない。大通りはまた、側道の沢山交差しているものでなければならない。弾圧がはげしくなったときには、参加者は百名以下のグループになって、あちこちの側道に散っていく。彼らは大低一方通行の道を反対に走って、軍隊の車輌がつかまえにくいようにする。

軍隊が発砲すると、工作戦線から選ばれた特別幹部が、散っていく人たちを援護するために火焔ビンをなげつける。ちりぢりになって警戒の軍隊が引上げると、群衆はまたもや対決するために結集してくる。この散開―集中の戦術にとって、最も大切なことは機動性である。

（完）

アーレン・エイゼン・バーグマン
（Movement 1968, December, USA）

（訳者注＝PAについては本紙一八号「ドブレ『革命のなかの革命』―その長所と弱点」（ポール・スイージー、レオ・ヒューバーマン）で高く評価されている。

訳者＝榎本義二）

ラテンアメリカの面積の半分をしめ、九千万の人口を持つブラジルはアメリカ帝国主義のラテンアメリカにおける最も重要な根拠地である。それは盛上る革命運動――いろいろな面でわれわれのものと似ており、われわれが闘いとらなければならない方向を示している運動――の本拠でもある。

〝人民行動〟（Popular Action）はブラジルの秘密革命組織であり、幹部からなる組織である。〝人民行動〟はキリスト教民主組織として発足したのであるが、いまや社会主義をかちとるために公然と武装闘争をしており、学生、労働者、農民、兵士の四つの戦線に組織されている。

今のところ学生戦線が、独裁と帝国主義に対する政治闘争でもっともの活動的である。ほとんどの学生の活動はブラジル全国学生連盟（UNEB）によってすすめられている。UNEBは〝人民行動〟によって指導されている。一九三七年に結成されたUNEBは最近までアメリカ合衆国の多くの学生組織と同じように、改良主義的な官僚制の団体だった。